

実習生も共に集う6月2日の朝、田中和幸副校長先生の講話がありましたので紹介します。

## 「附属長野小のちから」

～ 6月2日 副校長講話 ～

みなさんにずっと、聴いてみたかったことがあるんです。これからここに出される言葉を見て、みなさんは何を感じるか、教えてほしいんです。

〔スクリーンに「素朴な疑問」が映し出される〕

簡単な質問というか、これを見て何を感じるか。この後にギザギザのところの言葉を見て「先生、わかりました」って言ってくれたら、先生、どんなにか楽なんだけど…

〔スクリーンに「電車の乗車マナーを守りなさい!!」が出る〕

電車の乗り方、よくないです。電車のマナーを守りなさい。

どう? 「田中先生が言うならやります」って、言ってくれるかな。

(「はい」という声と、ざわざわが起きる)

関先生「副校長先生。普段、こんな風にいうと、子どもたちは納得しないという感情を出してきますけど…」

児童1「理由もないのに、やれって言われている気がする」

児童2「ここでいきなりマナーを守りなさい、って言われても、どんなマナーかわからないのに、守りなさいって言われてもわからない」

児童3「突然、強く言われても、責められているみたいで、逆に聴きたくなくなるし、電車の乗り方とか教えてから、もうちょっと優しく言ってくれないと、聴く気になれないかもしれない」

児童4「自分はちゃんとしてた、って思っていたら直らないかもしれない」

なるほど。だとしたら… 関先生、今のような一方的っていうのは、やっぱり学級でも「ん?」って感じですか?

関先生「実はよくやってしまっって、コレじゃだめなんだと、いつも感じさせられちゃうんです」

\* \* \* \* \*

このお話伝わるかなあ。〔スクリーンに「金ヶ崎のたたかい」が出る〕

〔織田信長の簡単な紹介、金ヶ崎城のおおよその位置、信長が置かれた絶体絶命のピンチ(敵の朝倉義景と対峙していた最中、妹お市の夫である同盟者、浅井長政の突然の裏切りによる背後からの挟撃を知り、今すぐ逃げても自分の城に無事に帰れないかもしれないという)状況の



説明]

織田信長の仲間たちは逃げ出すわけです。でも、簡単には逃げられません。後ろからどんどん追ってくるわけです。

その時です。織田信長の家来であった、木下藤吉郎、のちの豊臣秀吉に、織田信長はこういったそうです。「藤吉郎… しんがりは頼むぞ」

ここでいう、しんがりとは何か。漢字で書くと殿様の「殿」という字をつかうんです。意味は、逃げる仲間の中で一番うしろを担当する仲間。順番の「一番うしろ」のこと だそうです。信長は秀吉にどんなふうに「しんがりを頼むぞ」といったのでしょうか…。

後ろから追って攻めてくる敵とたたかう秀吉。これ以上、仲間を殺されるわけにはいきません。しかしきつとこんな気持ちももったことでしょう。「生きて帰れたら… か」

後ろからどんどん攻めてくる敵と戦う木下藤吉郎 のちの豊臣秀吉。その姿に応援部隊も加わり、見事にしんがりをつとめることとなったのです。

秀吉が、信長のいいなりのまま、ただ一番後ろをついていただけなら、おそらく全滅していたことでしょう。しかし、秀吉は違った。仲間を守るために、必死で考え戦ったからこそ、仲間もふえ、応援部隊もうまれたのです。



鷺田清一（わしだきよかず）さんという人は、こんなことを言っています。

『先頭で指示を出す人がいるだけでは、成り立たない。なぜなら、その人がいなくなった途端、動けなくなってしまう。むしろ、リーダーの言ったことを考えて自ら動く、いわばフォローアップしてくれる人が大切だ。』

また、武田鉄矢（たけだてつや）さんもこんなことを言っています。『大切なのはリーダーではなく、「一緒に考える仲間たち」である』と。

私は、田中先生は、この話を聞きながら、思ったことがありました。

この言葉は、そのまま、附属小のみなさんのことなのではないかと。長野小の色、長野小の子どもたちの力というのは、先生が中心じゃない。先生が言ったから、そうなるんじゃない。先生でも友だちでも相手の思いを聴き、受け取り、動くことが、この学校の風となり、土台を創ることになる。それは、間違いなく、ここにいる一人一人のみなさんの力であるということなんです。これが附属小の底力だと私は思うのです。聴いて、相手の心に立ってみる、そして私はどうするのかを考えてみる、私はどうしたのかを振り返る、がキーワード。行き着くところはやっぱり児童会テーマ、「聴き合おう」ですね。終わります。



児童会テーマ  
き あ  
聴き合おう

